

分科会のまとめ

昭和57年度厚生省心身障害妊婦管理研究班 不妊分科会

不妊分科会 飯塚理八

厚生省心身障害妊婦管理研究班不妊分科会は不妊治療が妊娠・分娩・出生児の予後に与える影響を臨床、基礎の両面から検討し、心身障害発生の防止に寄与することを目的とし、昭和五十五年度に発足し、本年度は最終年度の第三年目を迎えた。

不妊分科会の構成は前年度の構成と多少の変更が行われ、楠田研究者(九大)に替り、山口禎章(太田総合病院)が入り、森研究協力者(徳島大)が班員となり、新たに星合昊(東北大)が飯塚班員の研究協力者として加わった。

本年度の構成は以下の通り。

(1) 異常卵管の形成術に関する研究。

班員 飯塚 理八(慶大)

研究協力者 星合 昊(東北大)

(2) 人精子に関する研究。

班員 和久 正良(帝京大)

研究協力者 星 和彦(仙台社保病院)

(3) 生殖細胞の抗原性に関する研究。

班員 森 崇英(徳島大)

(4) 人工授精、および不妊高年齢婦人の治療後の妊娠と出生児研究。

班員 大野虎之進(東歯大)

研究協力者 山口 禎章(太田総合病院)

研究方法

飯塚班では前年度までの人卵の研究に引き続いて本年度は異常卵管の形成術に関する研究を行った。飯塚班員は不妊対策の一つの課題である卵管通過障害の研究に取り組み、卵管機能の診断のために子宮卵管造影法と卵管鏡の読影と卵管内膜細胞の状態の相関を検討した。さらにこれら所見と卵管形成術(①肉眼手術、②マイクロサージャリー)の予後の関連性についても研究することとした。研究協力者の星合らは、本年度の研究を三つに大別し、①アンケート調査による卵管形成術の実施状況、必要性、設備状況をまとめ、②形成術適応決定のための腹腔鏡の必要性の研究、③使用される油性造影剤の基礎的検討を試みた。

和久班では和久班員を中心に造精子機能の研究に取り組み、停留率丸の基礎研究として前年度まで温度(とくに高温条件)と蛋白合成の研究に引き続き本年度は雄性ラットを用いて、率丸の血管系の形態変化と造精子の研究を行った。研究協力者の星らは、前年度まで受精におけるヒト精子環境について、いくつかの因子について検討してきたが、本年度は精子の受精能獲得促進物質について研究した。

森班員はヒト不妊症の病因的意義を確立する目的で、不妊婦人血清中に存在すると思われる抗透明帯自己抗体を受身赤血球凝集反応を応用し抗体価の半定量を試み、さらにヒト卵透明帯付着精子および貫入精子の数を算定する精子貫入試験より抗体の受精に及ぼす影響を検討した。

大野班では前年度まで、いわゆるAIH、AID妊娠・出生児の予後調査および児の心身の発育を調査し、続いて排卵誘発と人工授精併用妊娠・出生児の調査を行ったが、本年度は35才以上の高年不妊患者の妊娠予後および出生児の調査を試みた。研究協力者の山口らは、群馬県太田総合病院と慶應義塾大学病院というほぼ同規模の分娩数をもつ二施設の高年不妊患者の妊娠・出産の占める割合とその出生児について調査をした。

研究結果および考案

飯塚班の研究では、慶大産婦人科外来を受診した不妊患者5000名の内、卵管障害に起因した不妊の占める割合は26.9%であるとした。この内で222例に肉眼手術あるいはマイクロサージャリーによる卵管形成術を施行した。術式は卵管周囲癒着剝離術、卵管開口術、角部卵管吻合術、卵管端々吻合術に大別されるが、222例中、51例(23.0%)の妊娠例を得た。この術後妊娠率と他のいくつかの検査法から卵管形成術の適応を設定した。星合らの卵管形成術のアンケート調査では過半数の施設が何んらかの形成術を行っており、マイクロサージャリーも約半数の施設で実施されていることが判明した。また油性、水性の造影剤とも腹腔内癒着を惹起しないことを基礎実験で確認した。

和久班の研究ではラットの幼若、成熟、老令各期の辜丸血管鑄型を樹脂鑄型法により作成し、電子顕微鏡にて観察したところ、造精能と一致する有意な変化がみられた。また片側辜丸を停留させると健側辜丸の毛細血管の構造に変化を来たすことも見出した。協同研究者の星らは in Vitro でヒト精子受精能獲得におよぼす各因子を検討した結果、カリクレインにその効果がとくに顕著であることを見出した。

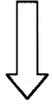
森班では透明帯抗体の陽性率を上記の方法で不妊患者群(n=88)、対照群(n=90)を検索したところ、前者に有意に高率であることを見出した。これら陽性者の血清を卵に作用させたところ、著しい精子貫入阻止効果のみ、今後の機能性不妊症への新しいアプローチを開いた。

大野班では高年不妊患者で人工授精で妊娠した例を調査したところ86例(うち双胎1例)の症例を見出すことに成功し、アンケート調査あるいは直接面接調査を行った。この結果、不妊患者の妊娠年齢は35才より44才の間に分布し、分娩形成中、帝切は27例であった。また生下時体重の平均は男女それぞれ3,249gm,

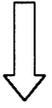
3,201gmであった。協同研究者の山口らは前述の二施設の総分娩数の中から高年不妊患者の分娩例を調査したところ、太田総合病院の2年間の総分娩数1,904例中、35才以上の分娩例は95例(5%)であり、この中で不妊患者による分娩例は18例であった。一方対照とした慶大では1,865例の分娩中、35才以上は228例、不妊患者の分娩は64例であり、平均地方都市と都会の不妊センターにおける明らかな差異がみられた。また、これら二施設における高年不妊患者の分娩形式の内、帝切率はそれぞれ27.8%、43.8%であった。一方これらの出生児よりは奇型の発生は認められなかった。

要 約

本分科会は三年にわたり不妊治療という人為的操作が妊娠・分娩・出生児におよぼす影響について基礎・臨床の両面から研究した。その結果、二つにまとめられた研究報告にみられるように、心身障害発生防止の基礎となるいくつかの研究成果が得られたが、同時に日進月歩の生殖生理学研究の発展にも多大の貢献を与える成果も得ることが出来た。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

本分科会は三年にわたり不妊治療という人為的操作が妊娠・分娩・出生児におよぼす影響について基礎・臨床の両面から研究した。その結果,二つにまとめられた研究報告にみられるように,心身障害発生防止の基礎となるいくつかの研究成果が得られたが,同時に日進月歩の生殖生理学研究の発展にも多大の貢献を与える成果も得ることが出来た。